

伝道を支える祈り

近藤勝彦

世界には色々と変化が起き、これから先どうなっていくのか多くの人々が不安を抱えています。昨年イギリスが EU 離脱を決定し、アメリカでは世界のことよりアメリカが第一と主張する大統領が選ばれました。世界は大国がみな内向きになる時代にさらされ、自国第一主義の競争と争いになる予感もあり、人々は行く先不明の不安を感じています。人生も世界も変化しさえすればよいものではないでしょう。どんな変化の中にも変わることのない真実、確かな支え、世界がどう揺れ動こうとも揺らぐことのない信頼の基盤を私たちは必要としているのではないのでしょうか。聖書は「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ」と語ります。「草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」(ペトー 1・24-25; イザ 40・8) と伝えています。そして「これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです」と語っています。キリスト教信仰は、福音を信じ、御言葉が伝える生ける神には真実があり、信頼でき、その約束を信じて進んで行くことができると信じています。主イエス・キリストにあって神は私たちと共におられ、主イエスの十字架によって私たちの罪や悪や死を克服し、私たちを赦し、神の子にしてくださいました。「神我らと共にいます」とのキリストの福音は、どんな時にも私たちの支えであり、助けであり、慰めであり、生きる力です。その主キリストの福音、十字架の福音にして神の国の福音であるキリストの福音を私たちは信じ、それによって生かされ、それを証しし、それを伝えます。それが教会の使命であり、私たちの人生の理由です。教会が教会として恵みによって召され、キリスト者が起こされて、世に派遣されているのは、このキリストの十字架の福音、主の十字架によって御国に入れられるその神の国の福音を伝える伝道のためです。そこにまた人類の救いもあります。私たちの伝道は人類の救済のためであり、神の国のためであり、神の御栄光のためです。

1、よき知らせを伝える

福音は「よき知らせ」という意味ですが、伝道のためには「福音」とは何かをキリストの御業から、そしてそれを証言している聖書によって繰り返し確かにされなければならないでしょう。それを聖書の証言によって示された「驚くべき宝」として聞き続け、発見し続けることが大切でしょう。主イエス・キリストによって生起し、聖霊によって信じることを得させられた神の福音は、「神の偉大な出来事」を語っています。キリストによる神の偉大な出来事は、何物にも替えがたい高価な宝です。宝物は通常、私たちが捜して見つけ出すもので、見つけたら他のすべてを売り払ってでも買い求めるものです。しかし福音というこの宝は、私たちが見つけたのではなく、「神が私たちを見つけてくれた」ということです。キリストによって捜し出し、大変な労苦の末見つけ出し、見つけ出してくださいましたこ

とに、神自ら大きな喜びの中にあると言います（ルカによる福音書 15 章）。私たち自身が神の宝にされているのです。ですから伝道によって伝えるのは、あなたは神によって親しく捜し求められ、主イエス・キリストの十字架によって神の憐れみの中で見つけ出されているということです。あなたは孤独でも迷子でも無捨てられた人間でもない。神の大きな喜びの中に迎え入れられている宝とされた人なのだと伝えることです。

福音を伝えるには、他にも色々な表現が可能です。福音を伝えることは、それを信じて受け入れる信仰を伝えることであり、新しい人生を伝えることでもあります。具体的には教会の礼拝に招くでしょう。いずれにしても厳然たる事実、主イエス・キリストにあってあなたは神の宝物にされている、その客観的な事実、主イエスの十字架があなたのために起きている、あなたのために神は御自身の独り子を惜しまなかったと伝えることでしょう。甦りのキリストは常にあなたと共におられると伝えることもできます。キリストによってあなたは神の国に受け入れられていると伝えることも大事なことでしょう。

福音とそれを受け入れる信仰は、その人を変えるに違いありません。その人を新しい人にします。古き人から解き放ち、新しくします。罪の支配から解き放ち、絶望や孤独から解放し、不安や恐れから自由にし、神との交わりの中に、そして神の子らの交わりの中に生きる者とされます。キリストに結び合わされ、キリスト者とされます。

キリスト者というのは、洗礼によってキリストの十字架の中に入れられ、キリストと共に死に、キリストと共に新しく生かされ、神の子とされた人です。その人は、キリストによって神に愛され、神の国を本国とし、キリストにあって聖霊を受け、神に仕え、人々を愛し、神の国の希望をもって生きる人です。その人はキリストの体である教会に洗礼を通して加えられ、神とその御国の栄光のため、また他の人々のために福音を伝えるでしょう。主イエスの福音を信じることで変えられた人は、福音を伝える人、主イエス・キリストにおける神の救いの御業を証言する証し人にされます。どんな迷いや不安の中でもキリストのものとしてされたことは揺らぐことがなく、神の恵みの中で希望を失わない人生に変えられています。

2、伝道を支える祈り

① 祈りに親しむ

今日の講演題は「伝道を支える祈り」という題です。「伝道」があると共に、それを支える「祈り」があることについて語ろうと思います。「祈り」は通常、誰でも心にもっているものですが、なかでもキリスト者は、祈る相手を知っています。神からむしろ知られています。主イエスにあって私たちは神から見出され、神に知られた者であり、「主イエスの名」によって祈ることを期待され、祈るように求められています。主イエスの名によって祈るのは、主イエスによって神の赦しの中に入れられているからです。神の赦しの中で、神に心を打ち明け、率直に助けを求めることができます。祈りは神と会話し、神とのコミュニケーションの中にあることです。ですから、別段、切実な願いを持っていると特に意識し

ない時にも、神に感謝し、神に語りかけます。時間を決めて祈ることもあるでしょう。そのうえで、どんなときにも、折に触れて祈り、いつでも祈ることが大切でしょう。

何をどう祈ったらよいかは自由です。神の赦しが私たちを自由にし、恥じらいやためらいなしに自由に祈れるようにしてくれます。祈りたい気持ちが起きないときもあるでしょう。気付いたら祈りを忘れていたということもあるかもしれません。しかしその時にも祈るようにと求められています。感謝の祈りを忘れてはならないでしょう。祈りは神の方から求めてくださっていることです。祈れる自分ではないと思う場合もあるでしょうが、そういうときほど神の求めに励まされて、祈るべきです。子供が親を信頼し、親しみを持つように、「天の父よ」と祈るべきです。完璧な祈りを祈る必要はありません。

祈りは、祈っても祈らなくてもよいのではなく、祈らなければならないものです。祈ることは私たちの気分の問題ではありません。祈る気になれないときにも、祈らなければなりません。祈ることは神の子とされた者たちの「義務」です。祈ることは神の御命令です。しかしそれは不自由なことと考えるべきではないでしょう。神の御命令が私たちを本当に自由に変えてくれます。まず息をせよと神は命じておられるのと同じです。祈りは私たちの魂の呼吸です。まず神を呼べ、「われを呼べ」と主なる神は言われます。祈りは「義務」と言いました。祈りたくないときにも祈るべきです。しかしこの義務はそれを果たしていると大きな喜びであることが分かります。神は私たちに祈りを求めることで、私たちを本当に助けてくださっていることが分かります。

祈りは、神の赦しにより、神の力（デュナミス）である聖霊によって支えられ、執り成しを信じて不完全でも祈るものです。神に祈れることが私たちに平安を与え、真のくつろぎを与え、素直に神に任せることのできる者にし、希望と勇気を持って生きることができるようにするでしょう。心配なことがあると心配でたまらなくなるのが私たち人間の現実ですが、神に心を打ち開き、神に信頼し、委ねることができれば、謙遜のうちにも力が湧くでしょう。神は祈る前から私たちの悩みや求めを御存じです。しかしその上で祈りに耳を傾けてくださいます。聞いてくださり、聞き届けてくださいます。もちろんそれですぐに願った通りになる、何でも思い通りになるわけではありません。どんなに祈っても願ったようにならない場合もあるでしょう。その時には、それもまた神のお考えがあつてのことと知り、受け入れることができるでしょう。聞き届けて下さらない中に神のより深い聞き届けがあると信じることができるでしょう。本当に祈れる人はすでに孤独ではありません。「弱いところでこそ恵みは一層満ち溢れる」と言われます。神の恵みの働かない領域はありません。

② 誰のために祈るか

それにしても祈りの優先順位について、一つの例を参考にあげてみましょう。17世紀のピューリタン運動を背景にして「ウエストミンスター信仰基準」というものが成立しました。それは「信仰告白」と大、小、二つの「教理問答」からなっています。その「大教理

問答)、つまり大人のための信仰の学びの中に祈りについてこういう文章があります。

問い [183] : わたしたちは、誰のために祈らなければなりませんか。

答え : わたしたちは地上の教会全体のために、為政者たちと牧師たちのために、自分自身のために、わたしたちの兄弟たち、のみならず、わたしたちの敵のために、そして今生きている、またこれから生まれてくる、あらゆるたぐいの人々のために、祈らなければなりません。しかし死者のためや、死にいたる罪を犯したことが知られている人々のためには、祈ってはなりません。

ここには特に「伝道を支える祈り」が記されているわけではありませんが、祈りを反省する一つの材料にはなります。わたしたちはあまりに多く「自分自身のために」しか祈っていないことに気付くかもしれません。その前に「教会全体のために祈る」必要があると言います。しかも「地上の教会全体のために」というのですから、伝道の願いを込めて祈ることも加えることができるのではないのでしょうか。今日では、イスラム圏の中であって会堂がテロで爆破された教会もあります。自然災害で会堂が壊れた教会もあります。そういう教会を含めて「地上の教会全体のために」祈るのが第一だとウエストインスター信仰基準は言います。そして次に「為政者たちと牧師たちのために」祈るとあります。これはその時代の状況を示しているのですが、当時は教会改革がイングランドの国家改革と重なり、毎週水曜日には牧師たちがかわるがわる議会で説教に行った時代でした。今日の日本の状況とは異なります。しかし伝道のことを思い出すと、為政者たちが「信仰の自由」のために「立憲主義」に立ってそれぞれの国の政治を行うことは重大な基盤になるでしょう。政治の基本の分かる為政者たちが起こされて政治を行うよう祈ることは重大なことに違いありません。そして牧師たちのために祈ります。それぞれの群の礼拝と伝道に仕える牧師たちのために祈りますが、同時に他の教会の牧師であれ、牧師たちが一団となって伝道に働くことができるように祈るべきでしょう。そして祈りの順序として、兄弟たちのため、さらに敵のために祈るということです。そして今生きているすべての人のため、これから生まれてくるすべてのひとのために祈ります。その中に伝道の祈りを込めることは大切なことではないのでしょうか。今生きている人、これから生まれてくる人、その人たちに福音が伝えられ、それを信じる人が多く起こされるように祈ることができます。「祈らなければならぬ」と言われています。

③ 何のために祈るか

「誰のために祈るか」ということと共に「何のために祈るか」あるいは「何を求めて祈るか」というテーマもあります。その重大な手本は「主の祈り」です。「主の祈り」は「伝道を支える祈り」になっているのでしょうか。まさにそうになっていると思います。「伝道を支える祈り」が「主の祈り」には含まれているでしょう。特に前半の三つの祈りは伝道に深く関わっているのではないのでしょうか。「御名が崇められますように（聖とされますように）」、神の御名が崇められるとは聖なる神がまことに聖なる神として礼拝され、讃美され

ることです。万物の礼拝がなされることこそ、伝道が目指していることでしょう。「御国がきますように」「御心が天になる如く地にもなりますように」。神の国が来るために福音がまず伝えられなければなりません。神の御意志の遂行は伝道を不可欠な契機にしています。神の忍耐がなおしばらくの伝道の時を猶予しておられるのです。「御国がきますように」「御心が天になる如く地にもなりますように」との祈りには、伝道のための祈りが含まれています。

3、伝道は誰がするか

① 神御自身が伝道に働いておられる

「伝道を支える祈り」というテーマは、祈ることで伝道を支えることができるという事実を示しています。伝道のために何をすることにせよ、あるいは色々なことをすることができるにしても、できないにしても、祈ることはできます。伝道のために何かできないかと考え、できることがあまりなくて、そうだ「祈ることならできる」ということもあるでしょう。他の色々なことができる、しかし「まず祈ることからはじめなくてはならない」ということもあるでしょう。伝道のために祈ることができ、またまず祈ることからはじめなければなりません。それには深い理由があります。それは、伝道は誰がするのかという問題です。伝道は誰か人間がするより、もっと根本で神御自身が伝道してくださっているからです。確かに私たちも色々苦心して伝道のために何かできないか、できることなら何でもしようと思います。そして事実いろいろなすべきことがあるとも言えるでしょう。しかしそれでも、本当の意味で伝道は誰がしているかと問えば、それは神御自身が働いておられるのです。伝道はその意味で「神の伝道」「神御自身がなす伝道」です。神が一人一人を捜し、見つけ出し、そして御自分のもとに呼びよせてくださいます。主イエスの話にある 99 匹の羊を野原に残してでも一匹の失われた羊を捜し出す羊飼いの（ルカ 15・1-7）は、神御自身です。そして捜し出したとき大きな喜びが天にあると言われました。御自分のもとに呼び寄せさせるために一人を捜し求め、見つけ出す神は、「伝道する神」と言うことができるでしょう。私たち自身そのようにしてキリスト者とされたのです。ですから伝道に当たって、神に是非捜し出して下さい、見失われ迷子になっている人がいます、多くの方が迷子です、この時代ほとんど皆が迷子です、神よ、見つけ出して下さいと祈るべきでしょう。神が見つけ出してくださらなかつたら、人間が何をしようとも伝道にはならないでしょう。伝道は私たちの側から言うと、まず祈りからはじまらなければならないものです。伝道は神の業だからです。

② 伝道される人のために祈る

「兄弟たちのため」「敵のため」「今生きているすべての人のため」「これから生まれてくるすべてのひとのため」に祈るとありました。伝道を支える祈りは、あの人が福音を受け入れてくれるようにと祈ることがあるでしょう。祈りは「愛の表現」でもあるでしょう。

愛すると言うことは、その人のために祈ることではないでしょうか。その人がキリストのものとされるように祈る、神の宝とされていることを信じるように祈ります。それはすでに伝道の重大な祈りです。

③ 伝道に用いられている人たちがいる

そのうえで伝道に用いられている人々がいます。牧師・伝道者はそういう人ですが、それだけではありません。洗礼を受けて主のもの、キリスト者とされた人はみな主を証しし、伝道に用いられている人です。神はキリスト者を用いて伝道を進めます。ですから信仰者は伝道の「協力者」です。パウロはだれだれが「協力者」(ロマ 16・3, 9,21)である、その人をよろしく頼むとよく書きました。その中には「神の協力者」(テサー 3・2)という言い方もされています。私たちは伝道に共に働く協力者、伝道者の協力者ということもありますが、「神の協力者」にされています。その神の協力者のために祈る必要もあるでしょう。私たちも協力者として用いてくださいと祈ることができます。そう祈る必要があるでしょう。協力者を起こしてくださいと祈ることもしなければなりません。

4、伝道の盟約共同体としての教会

最後に教会とは何かについて一言お話ししたいと思います。教会は「キリストの体」と言われ、また「恵みにより召されたる者の集ひ」と言われます。教会の使命は何か、なんのために教会はあるのかと言えば、教会でなければできないことをするためです。それは「公の礼拝」を守ることです。そして「福音を正しく宣べ伝える」ことです。礼拝と伝道は他にまかせられない教会の使命です。そこには洗礼があり聖餐があります。私たちに捜し求め、見出し、御自分のもとに集めて下さった神、私たちに御自分の宝にしてくださった神を礼拝し、その福音を伝道します。洗礼と聖餐式は礼拝で行われます。洗礼によってキリストに結ばれ、聖餐に拠って神の国の交わりにあずかります。そのようにして神の国のまっただき到来に備えます。それは教会だけがなし得ることです。「陰府の力も対抗できない」(マタ 16・18)と言われ、教会には「天の国の鍵」(16・19)を授けられているとも言われます。それが真の教会です。

「福音を宣べ伝える」ことは、キリストへと導き、洗礼に導きます。洗礼によってキリストと共に古い自分に死に新しく主のものとして生きていきます。そしてキリストの命と愛と義を身にまとして神の前に立ちます。その洗礼は教会以外になし得ません。伝道は、神御自身の働きですから、私たちはその神の協力者として用いられながら仕えます。目的は神の国の完成と神の御栄光を現わすためです。神はその働きのために私たちに「協力者」として召し、集められました。伝道を支える祈りは、教会のあり方の重大な面を思い起こさせるでしょう。教会は「神の目標」を知り、その目標を共有した「神と人との盟約団体」です。共通目標に向かってパートナーとして働きます。伝道の困難もあり、試練もありますから、「戦いの教会」(エクレシア・ミリタンス)とも言われます。協力者は時に「戦友」

(フィリ 2・25)とも言われます。神の盟約団体に加入し一つの目的に向かって戦友として努力します。「洗礼」は神の国と神の栄光を共通目的にしてリクルートされた人たちの盟約団体への加入式です。そして「聖餐」は盟約の更新式です。この戦いの教会理解、盟約団体としての教会理解は、今日、ほとんど忘れられているかもしれません。しかし「伝道を支える祈り」の中でこの教会理解を思い起こし、取り戻すことができるでしょう。私たちは神の国と神の栄光のためという明確な目的に向かって神の伝道に協力するために神のパートナーとして集められた「召されたる者の集ひ」なのです。教会がこぞって伝道に邁進することができるように祈ってほしいと思います。それは「伝道を支える力強い祈り」になります。